

詩篇104篇

1 わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。わが神、【主】よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまどっておられます。

第一日

2 あなたは光を衣のように着、

第二日

天を、幕のように広げておられます。

3 水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。

4 風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使いとされます。

第三日①

5 また地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。

6 あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていた。

7 水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。

8 山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。

9 あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。

10 主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、

11 野のすべての獣に飲ませられます。野ろばも渴きをいやします。

12 そのかたわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています。

13 主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわぎの実によって満ち足りています。

第三日②

14 主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます。人が地から食物を得るために。

15 また、人の心を喜ばせるぶどう酒をも。油によるよりも顔をつややかにするために。また、人の心をささえる食物をも。

16 【主】の木々は満ち足りています。主の植えたレバノンの杉の木も。

17 そこに、鳥は巣をかけ、こうのとりは、もみの木をその宿としています。

18 高い山は野やぎのため、岩は岩だぬきの隠れ場。

第四日

19 主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています。

20 あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。

21 若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます。

22 日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります。

23 人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます。

24 【主】よ。あなたのみわぎはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています。

第五日

- 25 そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。
26 そこを船が通い、あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます。

第六日

- 27 彼らはみな、あなたを待ち望んでいます。あなたが時にしたがって食物をお与えになることを。
28 あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足ります。
29 あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、彼らは死に、おのれのちに帰ります。
30 あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます。
31 【主】の栄光が、とこしえにありますように。【主】がそのみわざを喜ばれますように。
32 主が地に目を注がれると、地は震え、山々に触れられると、山々は煙を上げます。
33 私は生きていますかぎり、【主】に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう。
34 私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、【主】を喜びましょう。
35 罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。
ハレルヤ。

「自然の詩篇」と言えば8篇や19篇が有名ですが、本篇はより壮大なスケールの「自然の詩篇」と呼んでもよいでしょう。いえ、むしろ「創造の詩篇」と言った方が適切かもしれません。本篇全体が創世記1章の天地創造の六日を軸に作られていることは明白です。「第一日」「第二日」…と、創造の各段階が賛美の出発点となっているのです。

冒頭と末尾を見ると、「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ」という、自分の魂への賛美の呼びかけによって挟まれていることが分かります。詩人は神の創造の御業の全体を眺め、賛美せずにはおられない喜びに満ち溢れているのでしょう。賛美で始まり賛美で終わる。この歴史とはそういうものなのであり、人の人生もまた同様でありたい。

第一日／創世1:3-5

「光を衣のように着る」という表現から、神が栄光をまとっておられる姿を想像することができるでしょう。創世記では光と闇の区別があります。闇の中にまず神の光が照り輝かなくてはなりませんでした。読者はここで、物理的闇と倫理的闇の両方をイメージすることができます。

第二日／創世1:6-8

ここでは「水」「雲」「風」「火」といった自然界の物質が登場します。それらが「天」を駆け巡り、雷鳴を轟かせ、雨となって地に落ちる。古代において、天空は山々によって支えられているドームのようなイメージが持たれていました。そして、神は天に御座を据え、命じるままに自然界を掌握しておられると考えられていたようです。

第三日／創世1:9-10／創1:11-13

5～9節では「地と海の区別」、14～17節では「植物と果樹の生成」と、二つの出来事が「第三日」を構築しています。地が整えられ、そこに生息する動物が神の恵みによって命を得る。具体的に「野ろば」「空の鳥」「こうのとりの」「野やぎ」「岩だぬき」という名称が出てくると、かわいらしい生き物の代表が次々と地に生まれ出てくる様子が想像できます。

第四日／創世1:14-19

ここでは「月」「太陽」が現れ、地が時間的秩序の下に管理されていることが明らかにされてきています。夜行性の「森の獣」「若い獅子」も神様におねだりして食物をいただいている。何とも平和な自然界の姿が描かれ、恐ろしいライオンでさえ神様のペットのようにかわいがられているかのようです。そして、ここで初めて「人」が登場します。人間も完全な神の秩序の下で安心して生きていくための産物をいただいている。

第五日／創世1:20-23

「海と空の生物」も忘れてはいけません。地球は表面の70%が海で占められているといえます。しかも、人が到底辿り着くことのできないほどの深さで生きている魚類の数々。この海の上を行き交う「船」など木の葉のようです。「レビヤタン」とは、創造のときの混沌を象徴する怪物ですが、ここではクジラの類のことが言われているのかもしれない。

第六日／創世1:24-28／1:29-31

地に生きる動物も人間も、海に生きる魚もクジラも、すべてが神の養いの下にあると告白されています。そのことを自覚し神に頼りきって生きる幸いを詩人は歌っているのです。

29～30節では、生物の死もまた神の御手の中にあることが語られているのでしょう。「御顔を隠す」とは、生物の命が失われる時のこと。「御霊を送られる」とは、命の息吹が吹き込まれること。生きるも死ぬも神の御心次第です。

最後に、詩人は賛美と祈りでもって締めくくります。31～35節には、大自然を支配しておられる神に向けて懸命に賛美をささげる詩人の姿があります。一点、「罪人が地から絶え果て、悪者どもがもはやいなくなりすように」という「罪」と関わりのある内容がポンと出てくるところが気になります。これは、神の創造の秩序を乱す人間の罪を表しているのでしょうか。被造世界は神が「すべて良かった」と評価されるほどに素晴らしいものでした。それにあれこれ手を加えるのは常に人間です。紀元前数千年という古代において、まだテクノロジーがさほど進歩していなかった時代にも、この詩人は被造世界を傷つける人間の罪を認識していたのです。パウロのことばもこだまします。

私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

(ローマ8:22)

救いの目的は、人間が本来の「管理者」としての使命を取り戻すところにあります。私たちが罪から贖われたのは、神がお造りになったものを心からの愛情をもって養い、傷ついたところに手当てを施す者となるためです。神のものを破壊する活動に終止符を打ち、むしろ呻き苦しむ世界に慰めを与えるべき存在とされました。この幸いな人生を主の御心を探りつつ歩んでいきたいと思えます。